



今年は願わくば“線”を描いて

2019年、明けましておめでとうございます。今年も当コラムをよろしくお願い致します。

さて、ここ数回に渡って様々な角度から見た個人的なパチンコ平成史を書いておりましたが、今回はお休みさせて頂き、昨年の遊技業界を振り返りつつ今年の見通しや希望などを書かせて頂こうと思います。

とはいえ昨年の遊技業界といえば、毎月のように店舗の減少が報じられ、10月にはパチンコメーカー・高尾の社長殺害事件が発生という、何とも暗いニュースばかりが思い浮かんで来てしまいます。特に後者を知った時は、ちょうど4年前の1月にセガサミー会長宅が銃撃された事件をすぐさま思い出し、ショックで背筋が凍るようでした。銃撃の容疑者は逮捕されたものの、このコラムを書いている12月下旬現在、高尾の方は未解決です。一日も早い事件解決も、年初にあたって改めてお祈りしたい気持です。

一方、昨年は新基準機幕開けの年となりました。それに伴い認定作業や保通協持ち込みなどホールやメーカーにおいて多少の混乱があったようですが、いずれも落ち着いた状況となりました。ホールでは「設定コーナー」作成など、早速新基準機の特徴を生かしたお店作りをしていたり、遊技客の一人としては打ちやすい環境であったと思います。今後は出玉面でのスペックダウンをどう乗り切るかという課題に向っていくこととなりますが、やはりこれまでの歴史を振り返れば、ゲーム性の工夫と遊技客への一層の配慮が重要と感じます。

遊技客への配慮に関し、2019年は7月から改正健康増進法により行政機関などが屋内全面禁煙になり、2020年にはいよいよパチンコホールなども対象になるとされています。そうした法規制を待たずに、ぜひ業界を挙げて主体的な動きを見せることが必要ではないかと思いま

す。また、10月からは消費税増税も行われます。そちらはまだ軽減税率関連などで混沌とした状況が続いているものの、遊技業界においては解りやすいシステムや説明作りに取り組み、混乱のないようにして頂きたいです。

そして、エンドユーザー拡大への取り組みとして注目しているのは、2月の「みんなのパチンコフェス」開催です。こうしたイベントは、記憶にある限りですと2005年辺りからスポット的に開催されるようになり、近年は「ニコニコ超会議」などへの出展や、メーカー単位でも新機種試打会などを行ってユーザー獲得を図っておられます。今回のフェスでは既存ユーザーに新基準機の魅力を知ってもらおうと同時に、そうした方々が連れて来られる休眠層や新規の獲得を目指したいとのこと。こうした試み（連れパチ、というコンセプト）は非常にいいと思いますが、発表会見でも主催の日工組関係者が危惧しておられた通り“点”で終わってしまっただけでは意味がありません。配布物などにつられて一過性のにぎわいを見せても、継続するかが勝負です。

2月以降は4月の「ニコニコ超会議」にまた出展されると仮定して、そこで終わってしまうのではなく、それ以降にも例えば販社関係の組合が持ち回りでエンドユーザー向けイベントを主催するなど、業界組織が横断的に続けていくことが必要ではないでしょうか？ 休眠層と新規を呼ぶため、点ではなく“線”を描いていく行動こそが、2019年には最も必要と思われる。



こうしたイベントも、単発では効果が……？ 継続開催を願います (かつて開催されたファン向けイベントのポスターなど)

じんぼう・みか

法政大学卒業後、文具メーカー勤務を経て業界誌記者となり、1993年独立。取材記事、コラムなど連載。近著「パチンコ年代記」(バジリコ、07年)